

二本木小学校いじめ防止基本方針

1 いじめに対する基本的な考え方

(1) 学校教育目標から

《学校教育目標》

「仲よく」ーみんな仲よく元気で伸びていく子ー

すべての児童が安心して学校生活を送り、様々な活動に取り組むことができるようにすることは、学校教育目標の具現化を目指していく上で欠かすことのできないことである。いじめ防止等の対策は、こうした児童の安心した生活を脅かすいじめについて、学校の内外を問わず、なくすことが大切である。

また、すべての児童がいじめを行わず、いじめを認識しながら放置することがないよう、いじめがすべての児童に関係する問題であること、いじめられた児童の心身に深刻な影響を及ぼす許されない行為であることについて、児童が十分に理解できるようにしていかなければならない。

加えて、いじめの防止等の対策は、いじめを受けた児童の生命・心身を保護することが特に重要であることを認識しつつ、学校、家庭、地域、その他の関係者の連携のもと、いじめ問題の克服を目指して行わなければならない。

(2) いじめの定義

児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているものと定義する。（「いじめ防止対策推進法」より）

(3) いじめについての基本認識

教育活動全体を通じて、以下の認識に基づき、いじめの防止等に当たる。

- ・いじめは、どの子にも、どの学校にも起こり得るものである。
- ・いじめは、人権侵害であり、人として決して許される行為ではない。
- ・いじめは、大人に気づきにくいところで行われることが多く、見ようと思って見ないと見つけにくい。
- ・いじめは、いじめられる側にも問題があるという見方はまちがっている。
- ・いじめは、学校、家庭、地域、その他の関係者の連携のもと、一体となって取り組むべき問題である。

(4) 学校としての構え

- ・生命・人権を尊重し、差別やいじめを許さない信頼感に満ちた学校を築く。
- ・児童の言動を正確に把握する方策をとる。
- ・全職員で全校の児童を見守る意識をもつ。
- ・全ての教職員が一致協力した組織的な指導体制により対応する。
- ・「いじめは人間として絶対に許されない」という意識を、教育活動全体を通じて、児童一人一人に徹底する。
- ・「いじめをしない、させない、許さない学級・学校づくり」を進め、児童一人一人を大切にする教職員の意識や日常的な態度を醸成する。
- ・教師の言動がいじめの温床になることがあることを自覚する。
- ・いじめの疑いがある事案に関しては、いじめられた側（弱い立場にある側）を最後まで守る姿勢をもち、指導にあたる。
- ・いじめが解消したと即断することなく、継続して十分な注意を払い、折に触れて適切な指導を行い、保護者と連携を図りながら見届けていく。

2 いじめの問題に対応する組織

(1) いじめ・不登校対策委員会の設置

いじめ対策についての意思決定を行い、すべての教員が一致団結していじめ問題に取り組むための指導的役割を果たす。いじめの問題の指導には、学級担任等が個々に取り組むのではなく、学校をあげて取り組みを推進し、状況に応じたメンバーでチームを組んで指導する。毎月1回、定期的に会をもつ。

① 構成

校長、教頭、生徒指導主任、教務主任、校務主任、学年主任、特別支援主任、養護教諭、保健主事、（関係学級担任）

② 役割

ア 学校いじめ防止基本方針に基づく取り組みの実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正の中核

イ いじめの相談・通報の窓口

ウ いじめの疑いに関する情報や児童の問題行動などに係る情報の収集と記録

エ いじめの疑いに係る情報があった際の組織的な対応

オ いじめ事案の事実関係の調査

カ 児童や保護者、地域に対する情報発信と意識啓発

(2) 子ども理解全体会の開催

全職員で児童の日常の生活について気づいた点などを出し合い、児童の心の有り様

などをつかむひとつの方策となるようにする。会で情報を交換し合う中から、いじめ・不登校などの兆候をつかめるようにする。毎月1回、定期的に開催する。

① 構成

全職員

② 役割

ア 気になる行動についての情報交換

イ いじめの疑いに係る情報の共通理解

3 いじめ防止等に関する具体的な取り組み

(1) いじめの未然防止

ア 安心して参加できる授業づくりの推進

- ・すべての児童が参加・活躍できる授業づくり
- ・お互いのよさを認め合える、学び合いを取り入れた授業づくり
- ・つきたい力を明らかにした、分かる・楽しい授業づくり
- ・正しい姿勢や発表の仕方や聞き方などの学習規律の徹底

イ 生命尊重や思いやりの心を育てる教育の推進

- ・さまざまな体験活動と関連させた道徳学習の推進
- ・体験活動を積極的に取り入れた授業づくり
- ・自主性や思いやりの心を育てるなかよしタイムの活動（ペア学級活動）や委員会活動

ウ 基本的な生活習慣や規範意識の育成

- ・社会における規範や決まりを守ることの意義等の指導

エ いじめ問題を解決できる学級・学年集団づくりの推進

- ・いじめに関する課題に主体的に向き合う機会を設定を通して、集団の自浄力を高める

(2) いじめの早期発見

ア 子ども理解全体会の開催

- ・全職員目で児童の生活をきめ細かく把握し、いじめのサインを見逃さない
- ・気づいたことを子ども理解全体会の場で情報交換

イ なやみアンケートと教育相談週間の実施

- ・いじめに特化した記名アンケートを学期に1回実施
- ・アンケートをもとにした教育相談を実施し、いじめのサインの積極的な発見を目指す

ウ 心を開いて相談できるための雰囲気と体制づくり

- ・日ごろの対話や誠実な対応による児童と教師、保護者と教師の信頼関係づくり

- ・日記指導など、心を開いて話せる場の保障
 - ・全児童を対象に教育相談の実施
 - ・養護教諭との効果的な連携
 - ・相談によってよい結果が出た例などの紹介
- エ 校外相談機関との連携
 - ・教育センターやこころの電話相談などの相談機関の機能や利用方法の周知

(3) いじめへの早期対応

※「いじめ発見・対応後の基本原則—どの子どもも大切な子ども—」に準じて行う

ア 組織的な対応

- ・いじめを発見した場合及びいじめに係る相談を受けた場合は、「校内いじめ問題対策委員会」に報告し、組織的に対応する。
- ・「報告」「連絡」「相談」「事後の報告」を徹底する。

イ 実態の把握

- ・当事者の訴えに基づき「事実」の確認を速やかに且つ慎重に行う。
- ・すべて時系列で記録を取る。複数での対応を原則とする。
- ・いじめられたと意識している側（立場の弱い側）に立ち対処する。
- ・先入観をもって事実確認をしない。

ウ 児童・保護者への指導

- ・いじめられた側、弱い立場にある側の不安を少しでも取り除き、最後まで守る配慮に心がける。
- ・いじめた側には、教育的配慮のもと、行為の問題点、いじめられる側の気持ちを理解させることを心がけて指導に当たる。

エ 安心した学校生活を送るための支援

- ・いじめが解消したと即断することなく、継続して十分な注意を払う。
- ・いじめられた側には、心の傷として残る場合も多いことを忘れない。
- ・いじめた側、いじめられた側ともに、定期的に家庭連絡するなど、保護者と連携を図りながら見届ける必要がある。

オ 周囲の児童への指導

- ・当該児童間の問題にとどめず、児童のプライバシーに十分注意した上で、学級及び学年、学校の問題としてとらえて、再発防止を含め、いじめ問題の根本的な解決を目指した指導を進める。

(4) インターネットやソーシャルメディア利用によるいじめへの対応

① いじめの未然防止

ア 情報モラル教育の計画的な実施

- イ 家庭でのルールづくりについての保護者への協力依頼
(参考：安城市小中学校 ソーシャルメディアガイドライン)

② いじめへの早期対応

- ア 書き込み画像の削除等の対応
- イ 警察や法務局等との連携

4 重大事態への対応

- (1) 重大事態が発生した場合は、速やかに安城市教育委員会に報告し、「重大事態対応フロー図」に基づいて対応する。
- (2) 学校が事実に関する調査を実施する場合は、「いじめ・不登校対策委員会」を開催し、事案に応じて適切な専門家を加えるなどして対応する。
- (3) 調査結果については、被害児童、保護者に対して適切に情報を提供する。

5 学校の取り組みに対する検証・見直し

- (1) 学校いじめ防止基本方針をはじめとするいじめ防止の取り組みについては、PDCAサイクル（PLAN→DO→CHECK→ACTION）で見直し、実効性のある取り組みとなるよう努める。
- (2) いじめに関する項目を盛り込んだ教職員による取り組み評価及び保護者への学校評価アンケートを年に2回実施し、いじめ・不登校対策委員会でいじめに関する取り組みの検証を行う。

6 その他

- ・長期休業中の生活については、事前指導を行い、休業中のいじめ防止にも取り組む。